

仮定法と代名詞の指示について

— 認知言語学の視点から —

山本 幸一

1. はじめに

仮定法の学習において、(1)のような仮定法の文と(2)のような直説法の文との関連づけは、練習問題によく見られる。

- (1) If I were not busy, I could go to the movies.
 (2) As I am busy, I cannot go to the movies.
 ところが、(3)のような仮定法の文と(4)のような直説法の文とを関連づけることはしない。
 (3) If I were you, I would ignore it.
 (4) As I am not you, I will not ignore it.

これは、(4)の文が成り立たないことが理由である。なぜ、(2)とは違い、(4)の文は成り立たないのであるのか。(4)の文が不適格であることはわかっても、その理由を明示的に述べることは簡単ではない。しかし、仮定法である(3)の文の性質に起因していると考えられる。本稿では、認知言語学の知見を援用して、(3)の文の性質を分析してみる。

2. 「主体」と「自己」の分離

同一節中において、主語と目的語が同一指示的な場合は、再帰代名詞の使用が義務的であり、(5)は許されるが、(6)は許されない。

- (5) I hate myself.
 (6) *I hate me.

しかし、仮定法の(3)の文と同じ条件節を用いた(7)(8)では、両方が許される。

- (7) If I were you, I'd hate myself.
 (8) If I were you, I'd hate me.

この場合の(7)と(8)の文の意味は異なり、各々、(9)と(10)の意味に対応している。

- (9) もし、私があなたなら、(その私)があなたである
 私は、(その)私が嫌いだろう。
 (10) もし、私があなたなら、(その私)があなたである

私は、(現実の)私が嫌いだろう。

Lakoff(1996)は、この現象を明快に説明している。まず、(1)-(4)の文の主語と、目的語の再帰代名詞の関係をしてみる。

- (1) You need to step outside yourself.
 (2) I'm beside myself.
 (3) I lost myself in writing.
 (4) You should take a good look at yourself.

Lakoffは、これらの例では、人間が、観察主体である「主体」(Subject)と、観察客体である「自己」(Self)の2つに分裂するとしている。Subjectは、主観的経験、意志、意識、知覚、判断などが宿る場所であり、Selfは、その他の、身体、感情、経歴や社会的地位などが宿る場所である。この点を(15)(16)でさらに見てみる。

- (15) I disappointed myself.
 (16) I'm disappointed in myself.
 (15)(16)では、主語がSubjectであり、目的語がSelfである。(15)は、Selfの設定した基準にSubjectがこたえることができず、「主体」が「自己」を失望させたという意味であり、(16)は、Subjectの設定した基準にSelfがこたえることができず、「主体」が「自己」に失望したという意味である。

3. 「主体」の遊離

人間が、SubjectとSelfに分裂するということは、観察主体であるSubjectの、観察客体であるSelfからの遊離を意味する。(17)の例では、この点がより明らかである。

- (17) I've been observing myself and I don't like what I see.

(17)では、観察主体(Subject)が、観察客体(Self)から遊離して、Selfを眺めているという意味である。

Langacker(1991)は、次の(18)から(19)への意味変化

には、主体化(subjectification)という現象が関わっているとしている。

(18) Vanessa jumped across the table.

(19) Vanessa is sitting across the table from Veronica.

主体化とは、概念化の「客体」である存在物や関係が、概念化の「主体」であるグラウンド(話者、聞き手、発せられる時間、場所を含む発話に関わる要素を統合的に指す概念)を意味に取り込む現象であり、ある表現の意味が、客体的な軸から主体的な軸に再編成されることとされている。(18)のacrossの意味が「物体が他の物体を跳び越えての移動」である一方、(19)では、物理的な意味が希薄化し、代わりに心的走査(mental scanning)が顕著となり、acrossは「ある位置から、他の物体を越えた反対側に物体が位置している静的関係を、視線が移動するかのように把握する」意味となっている。

(20)では、心的走査はよりはっきりしている。

(20) The outhouse is through the yard, over the bridge, and across the field.

この例では、観察主体であるSubjectが、庭、橋、野原を進んでいくととらえられる。(21)(22)も同様な例と考えられる。

(21) The hill gently rises from the bank of the river.

(22) This highway goes from Tijuana to Ensenada.

Subjectが進むのは、現実世界ばかりとは限らないことを、(23)が示している。

(23) I dreamt that I was Brigitte Bardot and that I kissed me.

Lakoffの説明は次のようである。夢の中では、「私」のSubjectが「バルドー」のSelfの中にあり、「私」(Subject)の意志が「バルドー」(Self)を動かしている。そして、「私」(Subject)が「バルドー」(Self)に、夢の中における「現実の私」にキスをさせる。つまり、夢の世界において、話者のSubjectが、遊離するのみならず、他人のSelfに乗り移ると説明されている。

4. 異なる Subject と Self の合成

(7)(8)の文を再び見てみる。

(7) If I were you, I'd hate myself.

(8) If I were you, I'd hate me.

条件節で、「私」のSubjectが「あなた」のSelfに乗り移ったことを示しており、帰結節の主語は、「私」(Subject)と「あなた」(Self)の合成人間を示している。(7)の帰結節の目的語は、その合成人間と同一指示的であるため、再帰代名詞が使われ、(8)の帰結節の目的語は、その合成人間とは異なった、仮想世界における「現実の私」を示しているため、代名詞が使われている。

以上の分析を基に、関連づけのできない(3)(4)の問題に戻ってみる。

(3) If I were you, I would ignore it.

(4) As I am not you, I will not ignore it.

(3)の帰結節の「私」は、「私」(Subject)と「あなた」(Self)の合成人間を示している。一方、(4)では、合成人間ではなく、現実の「私」を示している。この主節の“I”の指示内容の違いが、(3)(4)の関連づけができない大きな要因と考えられる。

一方、(24)(25)の書き換えは、不自然ではない。

(24) If I were rich, I would buy it.

(25) As I am not rich, I will not buy it.

(24)では、“rich”という属性が、Selfに付与されても、SubjectとSelfとの分離はなく、両文の“I”の指示内容が同じためであると考えられる。

参考文献

- Lakoff, G. (1996) “Sorry, I’m Not Myself Today,” G. Fauconnier and E. Sweetser, eds., *Spaces, Worlds, and Grammar*. Chicago: University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W. (1990) *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- (1991) *Foundations of Cognitive Grammar* vol.1, vol.2. Stanford, California: Stanford University Press.